大平本城（おおだいらほんじょう）

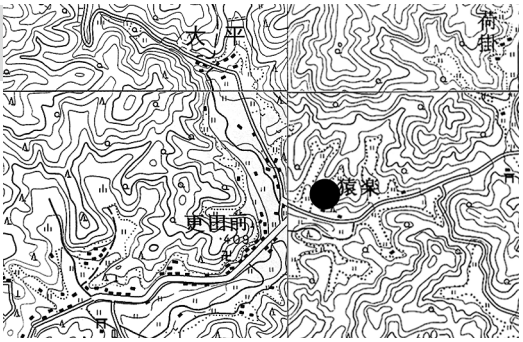
所　在　地　豊田市大平町下屋敷
（北緯35 度15 分7 秒 東経137 度14 分46 秒）

調査理由　急傾斜地崩壊対策事業

調査期間　平成23 年10・11月

調査面積　310 ㎡

担　当　者　池本正明



調査地点（1/2.5万「多治見・猿投山・猿爪・小渡」

調査の経過　急傾斜地崩壊対策事業に先立つもので、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

立地と環境　大平本城跡は現在の大平の集落を南西に見下ろすような尾根上に位置している。城郭は南側に伸びる尾根の先端部を残して堀切を設定した立地となっている。現存しないが、北西側の尾根続きにも堀切が存在した事が知られており、二つの堀切で丘陵の南北を区切って主郭とした構造となっている。主郭の東側は最大高が4mを超える土塁が設定されており、西側に強い方向性が観察できる。なお、北側に展開する谷の対岸、西側に伸びる丘陵端部には大平姫城跡が位置している。両者の位置関係から、大平姫城は大平本城と一連の存在であった事も推定されている。

この城跡は、『小原村誌』によれば、大内下総守久政の居城で、文正元（1466）年に松平信光の攻撃により落城したと記述されている。しかし、南西部の堀の形状などに戦国時代から登場する構造も指摘されており、15世紀以降も城郭が存在したものと評価されている。

調査の概要　今回の調査地点は、城郭の南西部に該当する。調査区では二条の土塁（11A区004SA・11C区006SA）とこれに挟まれた三か所の平坦面を確認した。平坦面は丘陵側が急峻な斜面となっている。このうち、上段と中段については城郭の時期に存在した事は明らかには出来なかったが、下段の平坦面は城郭の存続時期に存在したともの考えられる。

この平坦面はやや規模も大きく、西側を整地により拡張している。また、南側の土塁（11A区004SA）の端部がわずかに屈曲し、下段の平坦面を回り込むような形状をとる事も確認できる。ここからは近世の遺構（11A区002SK）も確認できるが、16世紀代の土器小片や、スサを混入する焼土塊や炭化物などを多量に含む大型土坑が１基（11A・B区003SK）検出されている。

調査区南北で確認できた土塁は、断ち割り調査の結果いずれも基底部に若干の整地を加えて地山土を盛り上げた構造で、残存状況の良好な南側の土塁（11A区004SA）は全長約14mを確認した。

出土遺物は大半が16世紀に属する。ただし、15世紀代に遡る資料も一部に含まれ、下段の平坦面の整地層からは16世紀後半頃の擂鉢片が１点出土している。前者は『小原村誌』に記される伝承、後者は遺構の観察所見とそれぞれ年代的に一致している。

（池本正明）

調査区遠景　（南から）

11A区全景　（南から）

11A区004SA断面　（西から）

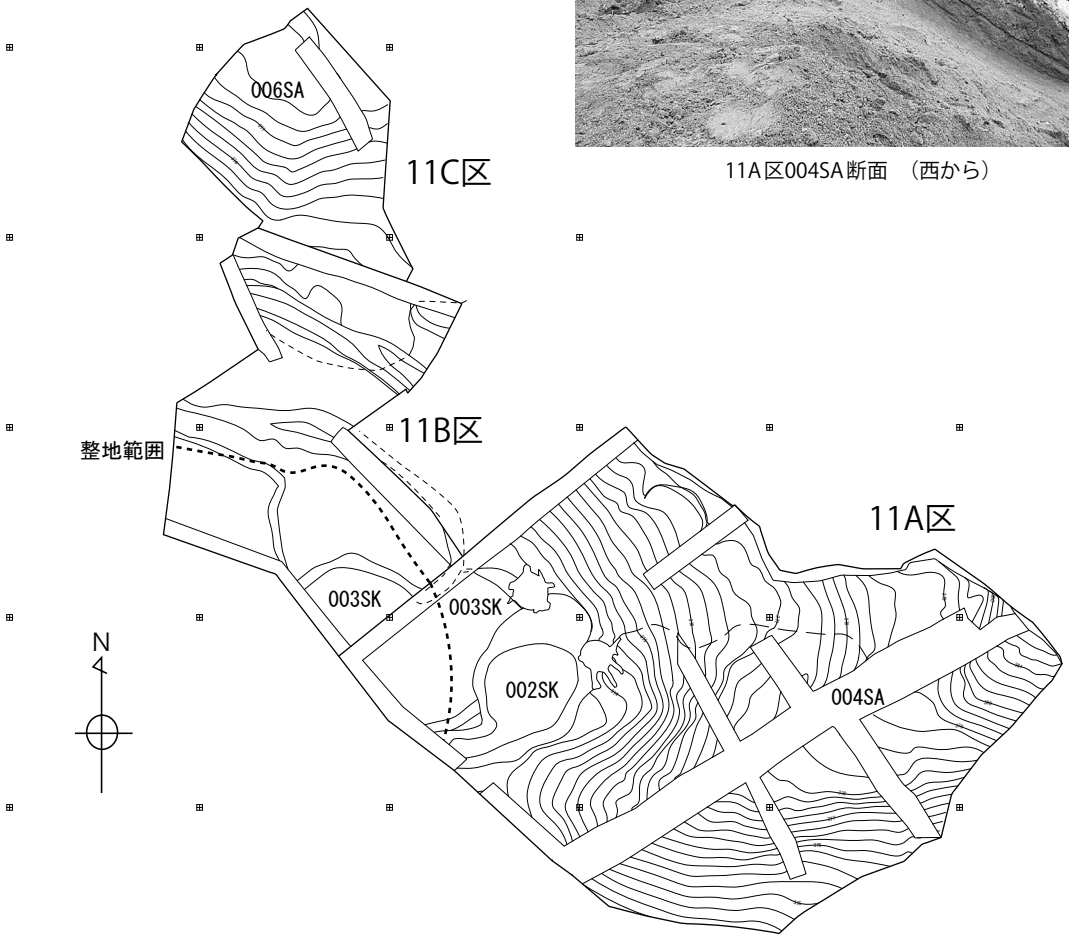


図1　大平本城全体図（1:200）

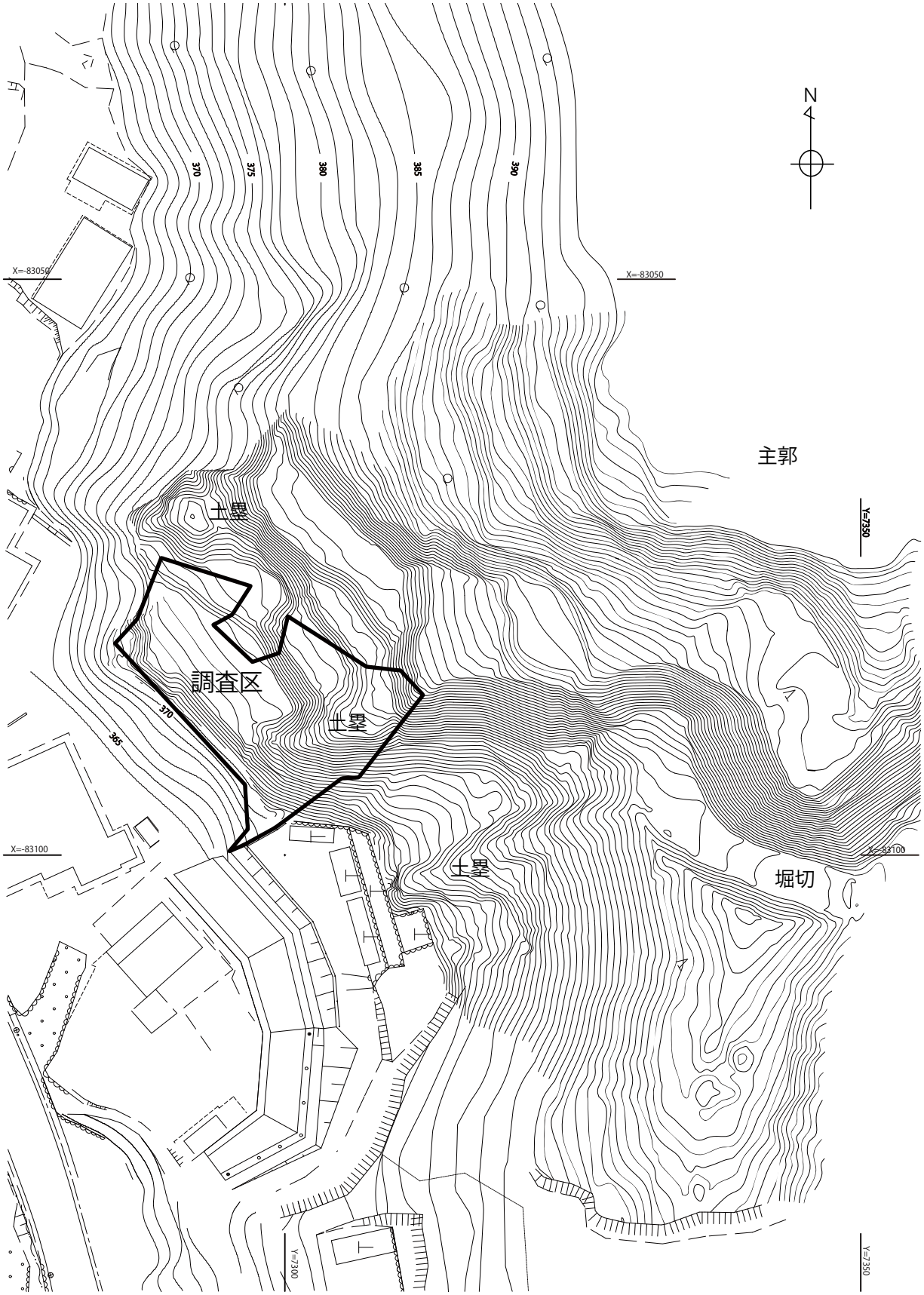


図2　調査区位置図（1:500）